

博士學位論文内容の要旨

学位申請者氏名	今井 友子		
論文題目	源氏物語の人物造型—金剛醜女説話の受容について—		
論文審査担当者	主 査	滝川 幸司	㊞
	審査委員	中前 正志	㊞
	審査委員	坂本 信道	㊞

『源氏物語』が、古物語、史書、和歌、歌謡、漢詩文、仏典等、様々な作品の影響を受けて成立したことは、古来明らかにされてきた。しかし、『源氏物語』に、極めて容貌の醜い女性、つまり醜女が、ある一定数登場することについて、それが何に基づくのかはほとんど注目されることがなかった。本論文は、この醜女の造型が金剛醜女説話に基づくことを論証するのが目的である。

本論文は、序論、本編、付編の三部構成であり、資料としてⅠ 仏典比較表、Ⅱ 金剛醜女説話比較表、Ⅲ 馬頭夫人説話比較表を附載する。

序論は、本論の目的を述べ、醜女造型に深く関わると考えられる、金剛醜女説話について、原拠となる『賢愚因縁経』や、その説話の継承、金剛醜女説話の類型を用いた説話など、仏典から日本の説話まで資料を整理する。なお、『賢愚経』によれば、金剛醜女説話は以下の通りである。主人公の波斯匿王の娘波闍羅（金剛）は、前世において一人の辟支仏を供養した故に王家に生まれるが、心中に聖者の醜さを蔑んだ罪により、極めて醜貌に生まれつく。摩利夫人の娘なので、王は「外人見せないよう丁重に守護せよ」と命じ、人に見せないように育てる。年頃になると、旧家の生まれで今は貧困の若者を捜し、大臣の位にして娘婿にする。夫の大臣は、王命により妻を人に見せないように鍵をかけて幽閉する。女は悩み、遙か遠くの仏に向かって、「我は何の罪により、幽閉されるのか、願わくば哀れみを垂れ、我が前に姿を現し、教訓せられよ」と念じる。女は敬虔・純心・誠実であったので、仏は女の志を知るとすぐに現れて、女を端嚴美麗に変える。大臣は妻が美しくなったことを王に知らせると、王は立派な車を用意して娘を迎え、そして王・夫人・王女・婿は仏のもとに行き、王女の過去世の因縁を聞くという話である。

本編は五章で構成される。第一章「源氏物語における末摘花の造型—金剛醜女説話の受容について—」は、末摘花の人物造型について、金剛醜女説話の要素と構想が一致する点から論じる。『賢愚経』と末摘花・蓬生巻について、主人公の金剛と末摘花が、「出自が高い」、「顔が極めて醜い」、「人に見せない」、「養護される」の共通点が見られ、蓬生巻では、源氏が「仏菩薩の変化の身」とされ、末摘花の変わらない誠実

な心を知って宮邸を訪れるのは、金剛醜女の前に仏が現れる場面に対応するなど、末摘花の人物造型だけではなく、物語の展開に関しても金剛醜女説話が利用されていることを論じる。

第二章「源氏物語における玉鬘の造型について—『原中最秘抄』が示す長谷観音の靈驗譚の関わり—」は、鎌倉時代の注釈書『原中最秘抄』が引用する長谷観音の靈驗譚「馬頭夫人説話」を手がかりとして、玉鬘の造型について論じる。主人公は長谷観音の利益により開運するだけでなく、Ⅰ馬頭夫人の醜貌と玉鬘の「かたは」要素、Ⅱ長谷観音への祈請、Ⅲ長谷観音の利益をもたらす人物との邂逅、Ⅳ馬頭夫人と玉鬘の変貌などの共通点が認められ、馬頭夫人説話の要素を玉鬘の人物造型に用いたと考えられる。なお、馬頭夫人説話の原拠は『賢愚経』の金剛醜女説話で、玉鬘の人物造型は、馬頭夫人説話に見られない金剛醜女説話の要素と共通しており、馬頭夫人説話と『賢愚経』の要素が組み込まれていると論じる。

第三章「源氏物語における「玉かづら」の意味—末摘花と玉鬘の—」は、『源氏物語』中、末摘花と玉鬘の二人のみに用いられる歌語「玉かづら」の意味について、金剛醜女と勝鬘夫人を同一人物とする資料により論じる。第一章と第二章において、末摘花と玉鬘の人物造型に金剛醜女の要素を見いだしたことを踏まえ、日本において金剛醜女説話が、勝鬘夫人の物語として展開した経緯を跡づけ、金剛醜女と勝鬘夫人を同一人物とするようになった過程を論じ、「玉かづら」の意味に、勝鬘夫人の「勝れた鬘（かづら）」の意味の含まれることを論じる。

第四章「源氏物語の指食いの女の造型について—「上陽白髪人」と金剛醜女説話の関わり—」は、帚木巻、雨夜の品定めに登場する、指食いの女の造型について、白居易「上陽白髪人」と金剛醜女説話との関わりを論じる。指食いの女と「上陽白髪人」との関係については既に先行研究に指摘があるが、「上陽白髪人」は美女であって、指食いの女のようなみにくい容貌とは異なる。その他、指食いの女は、金剛醜女の「精誠、敬心、純篤」を踏まえて表現されており、白居易「上陽白髪人」だけではなく、金剛醜女説話も人物造型に用いられていることを論じる。

結章「敦煌変文と源氏物語の人物造型」は、本編のまとめとして、金剛醜女変文と『源氏物語』に登場する醜女を比較することで、日本に金剛醜女変文に近い内容の説話が存在した可能性について考察する。金剛醜女変文は唱導の台本として、原拠の『賢愚経』にない醜女の特徴と美質が描かれており、それが『源氏物語』の醜女の要素と一致する。直接、変文が影響を与えたとは考えにくいけれども、日本に、金剛醜女変文に近い説話が伝わっていた可能性がある点について論じる。

以上、五章に亘る本編によって、『源氏物語』に登場する醜女の人物造型に、金剛醜女説話が利用されていたことを論証する。

付編「川口松太郎『愛染かつら』における「長恨歌」の受容について」は、小説『愛染かつら』における白居易の「長恨歌」と『源氏物語』の受容について論じる。明治から戦前にかけて出版された「長恨歌」を粉本とした作品を調査し、歌舞伎や新劇の上演・通俗小説の出版が盛行したことを明らかにする。この時期は、作者川口の生まれ

育った時期と重なり、「長恨歌」は人気の題材であったことがわかる。『愛染かつら』とは、美貌の看護婦高石かつ枝と病院長の令息津村浩三の悲恋譚で、主人公の人物描写に、「長恨歌」が用いられたが、その直接のテキストが、『歌行詩』（長恨歌・長恨歌伝・琵琶行・野馬台詩）の本文に、詳しい頭注を加えて刊行された『歌行詩諺解』（貞享元年版）であることを論じる。作者川口の知識に、漢詩文や『源氏物語』のあったことがわかり、日本人に人気のあった名文を用いることで、国民的人気の物語が誕生したことを明らかにする。